

京都府教育委員会



入賞作品集

第13回小論文グランプリ



はじめに

今、私たちが生きている社会は、人口構成の変化やグローバル化、各分野での技術革新など、さまざまな要素が複雑に絡み合いながら、かつてないスピードで変化しています。未来を正確に予測することが難しくなり、誰も経験したことのない課題に直面する場面が増えていく中で、正解のない問いと向き合って、自分なりの答えを導き出す力が今まで以上に重要になってきています。

生成AIの劇的な進化によって、文章作成や翻訳、要約など、かつては人間だけが担っていた作業をAIがこなすようになりました。そのため、「人間が文章を書く必要はなくなるのでは?」という声も聞かれるようになってきています。しかし、AIが文章を「生成する」ということ、人間が文章を「考えて書く」ことは根本的に異なります。AIは膨大なデータに残っている無数のパターンを組み合わせて多様な文章を作り出しますが、その出発点となる「問い」や「視点」を、AIが自ら考えるということはありません。どんなテーマを論じるのか、どんな切り口で文章を書くのか、どの部分を強調するか、誰に向けて書くのか、といった判断は、人間が行うのです。つまり、生成AIを有効に活用し、共存していくためにも「書くこと」に関する力を身に付けておくことが重要だということが言えるでしょう。

小論文グランプリは、「書くこと」を中心に「読む力」「書く力」を総合的に高めながら、中学校修了段階で二〇〇〇字程度の小論文を書く活動を通じて、社会に対応した実生活で活用できる力をはぐくむことを目標としています。単なる文章力の向上にとどまらず、課題と向き合い、物事を論理的に考え、導いた答えを他者に伝えることでより深い学びに向かっていくという取組でもあります。

現代の情報環境では、インターネットやSNSなどで似た意見や価値観ばかりが集まって繰り返し共有され、偏った考え方が形成されていってしまう。「エコーチェンバー現象」が起こる危険性が指摘されています。

便利な反面、まだ知らない世界に触れる機会が減り、視野が狭くなる可能性もあります。だからこそ、未知の情報や多様な考え方に意識的に触れ、様々な視点から物事を考える努力が必要となります。その上で、「自分はどう思うか」「なぜそう思うか」を論理的に考え、互いにアウトプットし交流することで、思考の枠組みが広がり、より深い学びが実現していくのです。

小論文をしたためていく中で、皆さんも自分の経験をどのように言葉にしてどんな視点で論じるかということや、多様な考え方もつ読み手に対して根拠や事例をどう示していくかなど、思慮を巡らせたことと思えます。これらは社会に出て、他者と協働していくための「生きる力」を支える大切な土台となります。

第十三回を迎えた小論文グランプリには、今回全六一校から【文集作品の部】に六四二点、【個人作品の部】に二六四点の応募がありました。これは過去最多の応募数であり、皆さんの意欲と取組の広がりを感じます。受賞作品はいずれも、論理的な構成と豊かな発想にあふれた力作揃いでした。

この作品集には、【個人作品の部】の最優秀賞と優秀賞の作品、【文集作品の部】の最優秀賞と優秀賞の学校名・総評を掲載しています。是非これらの作品から筆者の思考の足跡をたどり、学びや気付きを読み取って、今後自分が「何をどう書くのか」を考える際の参考にしてみてください。これからも、小論文グランプリが、皆さん一人一人の「生きる力」の育成に寄与し、より充実した取組へと発展していくことを心より祈念しています。

京都府教育庁指導部学校教育課長

三矢 哲郎

第十三回小論文グランプリ

A分野：国語、社会、数学、理科、外国語
 B分野：音楽、美術、保健体育、技術・家庭
 C分野：道徳、特別活動、総合的な学習の時間

(頁)

▼総評

1

〔個人作品の部〕

◎最優秀賞

A分野	遺伝子を超えて	木津川市立木津中学校	三年	永田	六花	3
B分野	スマホが奪ったもの・与えたもの	福知山市立南陵中学校	三年	植村	照来	4
C分野	「好き」が広げる世界	宮津市立宮津中学校	三年	岩西	遼	5

◎優秀賞

A分野	言の葉に宿る美	城陽市立東城陽中学校	三年	安道	凜香	6
A分野	言葉は生きていく	亀岡市立南桑中学校	二年	水原	美玲	7
A分野	森が教える「人間らしさ」	福知山市立南陵中学校	三年	山崎	真帆	8
B分野	見えないもの	木津川市立木津中学校	三年	小西	美蘭	9
B分野	「便利の達人」になる	亀岡市立育親学園	九年	寺竹	瑠音	10
B分野	歌が響く	綾部市立八田中学校	三年	四方	美音	11
C分野	「普通」のかたち	宇治市立西小倉中学校	三年	北村	彩実	12
C分野	ダジャレの名誉回復	亀岡市立南桑中学校	三年	赤木	燈茉	13
C分野	個人的な達成感を超えて	福知山市立三和中学校	三年	羽瀨	颯真	14

【文集作品の部】

最優秀賞

優秀賞

優秀賞

優秀賞

優秀賞

京田辺市立大住中学校

京都府立福知山高等学校附属中学校

城陽市立東城陽中学校

京田辺市立田辺中学校

木津川市立木津中学校

【資料】

小論文はどのように受けとめられるか 作品を審査する眼

小論文を書くための手引き

総評

審査委員会

1. 総論

第十三回となる小論文グランプリには、今年も京都府内の中学校からたくさんの方が集まりました。文集作品の部へは、府内の約一〇〇校の中学校のうち六一校から、全部で六四二編の作品が提出されました。またその中から、個人作品の部には一六四編の応募がありました。嬉しいことに、どちらも今までで最も多い応募数となりました。

特に今年度は、二年生の作品が多く含まれていたことも特徴的で、全体の四分の一近くが二年生からの応募となっています。継続した取組として、一つの授業だけでなく、学校全体で「書く」という意識を共有しながら臨んでいただいていることが伝わってきます。また、それぞれの作品からは、みなさんが「自分の考えを文章で表現してみたい」「小論文に挑戦してみたい」という気持ちを強くもっているのを感じることができ、京都府の中学生の意識や意欲の高まりを様々な面で実感するグランプリとなりました。

それではまず、形式面から述べます。例年、小論文グランプリでは、せっかく応募してくれても、字数が足りなかったり、決まりを守れなかったりして失格になる作品がありました。また、中には文字が乱れていて読みにくい作品も散見されました。しかし、近年はそうした作品がほとんどなくなってきています。応募者の中学生のみなさんが、「書く」という行為に対してとても真剣に、真面目に取り組んでいる一つの証拠と捉えています。

次に、内容についてです。今年度の作品は、どの作品にも、考えた過程や結論がしっかりと書かれていました。「文は人なり」という言葉があるように、文章には書いた人の考え方や性格が表れます。今年度の応募

作品には、問題意識がはっきり伝わるものが多くありました。どれを読んでも、書き手の強い思いや主張が感じられました。どれも個性があり、皆さんの「このことをもっと考えてみたい」「深く調べてみたい」という気持ちが文章から伝わってきて、とても好感がもてました。今回受賞した作品は、その中でも特に優れたものです。

2. 分析

今年の作品の特徴を、いくつかの視点からまとめてみます。

■段落数と文の長さ

まず、段落の数や文の長さについてです。審査を終えた後、優れた小論文の条件を探るために、毎回同じ条件でデータを取っています。入賞作品の平均段落数と、一文の長さです。今年の最優秀賞・優秀賞受賞作品一編は平均すると、段落数六・六段落になりました。全体を一二〇〇字として、一段落当たりの文字数は一八一字になります。原稿用紙九行くらいで一つの段落を作っているということが分かります。また、全体を通じた一文の平均文字数は約四二文字でした。これはこの間大きな差が見られず、今年も同じような傾向となりましたが、文章前半では文は短く、後半に向かうにつれて長くなっていくことが特徴的でした。

この数字から分かることは、文章の組み立て方に工夫があるということです。前半では、自分の発見や問題意識を短い文で書き連ねていきながらテーマや問題意識を示し、一定の論題が設定できると、その追究に向けて詳しく説明するために文が長くなっていきます。もう少し具体的に言くと、最初は「**〇〇〇〇**のことを考えた」ということを短い文で明確に伝え、だんだん「なぜ**〇〇〇〇**なのか」「どんな理由があるのか」を詳しく書いていって相手を納得に向かわせようとしているということです。

ちなみに、大学などで書かれる論文では、一文が一〇〇字を越えることや、もっと長くなることさえあります。学術論文は詳しく説明する必要があるからです。中学生の小論文はそこまで長くする必要はありませんが、「説明したいことが増えると、文が少し長くなる」というのは、どのレベルでも同じだと考えられます。

文章を書くときに、最初から「一文を四二字にしよう」と決めることはできません。でも、書き終わった後に「なんだかまとまりがない」「読みにくいな」と感じたら、段落の数や文の長さを数えてみることでヒントの一つになるでしょう。段落が少なすぎると、話題の切り替えがうまくできていないかもしれません。逆に多すぎると、話が細切れになっているかもしれません。一文の長さについても、短すぎると説明不足になり、長すぎると読みにくくなる可能性があります。数字は、文章を見直すときの一つの「目安」になるのです。自分なりに納得した表現になっているならそこまで気にする必要はありませんが、「どこか変だな」と感じたときのチェックの目安として考えてもらえるとよいかと思えます。

■題名の工夫

次に、題名についてです。今年の最優秀・優秀作品の題名には、「遺伝子を超えて」「言の葉に宿る美」「言葉は生きている」「普通』のかたち」「歌が響く」「ダジャルの名譽回復」などがありました。小論文の題名には、書き手の視点やテーマへのこだわりが鮮明に表れます。題名は作品の第一印象を決める重要な要素であり、読む人に興味をもたせたり、疑問を抱かせたりするような工夫があると、より強く引き込まれます。今年の応募作品には、問いかけや対比を用いたもの、抽象的な概念を短い言葉で表現したもの、さらにはユーモアや比喻を取り入れたものなど、多彩な題名が目立ちました。こうした工夫が、読む前から読者の期待感を高め、作品の魅力を一層引き立てるのです。

■言葉の使い方と文末表現

文章の中で使う言葉や、文の終わりの表現も大切です。今年の作品の多くが、口頃の学びで身に付けた言葉をつまく使っていることが印象的でした。特に「〜と考える」「〜ではないか。」など、断定しすぎず、読み手に考える余地を残す表現が多く見られました。こうした工夫は、文章に読み手を引き込み、共感や納得をもたらす効果があります。また一方で、はっきりと主張したいところや強調したい部分には「〜なのだ。」や「〜のである。」などを用いて、強弱を付けながら主題に迫っていく文章を、言葉や表現の面からも作り上げることができていました。

■全体のまとまり

最後に、文章全体の流れについてです。今年は、書き出しや序盤で提起されたテーマと、最後の結論やまとめの部分がかっちりつながっている作品が多くを占めました。「首尾の呼応」と説明されることもありましたが、論理的な文章では、最初から最後まで筋道を通すことが大切です。途中で話題が変わってしまったら、話が別のところに逸れてしまったらする作品は、ほとんどありませんでした。目指したゴールに、しっかりと読み手を連れていく。今年の作品は、その点でもとても優れていました。

3. おわりに

今年の作品は、丁寧に整えられた形式の中に、題名や文末表現、各所の言葉遣いまで工夫して主張を届けようとしている文章が多くありました。納得させられるような根拠や共感を得られる根拠を準備し、段落や文の長さを工夫しながら、考えをしっかりと伝えていく文章に引き込まれました。京都府の中学生のみなさんが、「自分の言葉で世界を考える」力を確実に伸ばしていることが分かり、とても嬉しく思います。来年も、さらに多くの挑戦と新しい発想に出会えることを楽しみにしています。

遺伝子を超えて

木津川市立木津中学校 三年

永田 六花

私は理科の授業で「遺伝子」について学んだ。その中で、現代では技術の進歩により「ゲノム編集」が可能となり、遺伝子を自由に組み替えることができること知った。特に、容姿や知能などを親の希望に合わせて設計する「デザイナーベイビー」という技術にふれ、親が子供を選ぶ時代が到来していることに衝撃を受けた。このように、親が理想の子供をつくるのが可能となった現代において、人間の価値はその遺伝子によって決まるのだろうか。

「デザイナーベイビー」のメリットとしては、遺伝性の疾患を取り除くことができる点や、老化現象を抑える点が挙げられる。一方で、親の理想によって設計された子供が、自分がデザインされた存在であることを知ったとき、「果たして自分は親から愛されているのか」「何のために生まれてきたのか」と疑問を抱く可能性がある。

私はこの「デザイナーベイビー」の技術から、親の価値観が子供の人格形成にどのような影響を与えるのかを考えた。たとえば親が子供の容姿や能力を設計できたとしても、心まで思い通りにすることはできない。優しさにあふれた子、愛情豊かな子になるとは限らない。そのような子供を、親は本当に愛せるのか。そして、子供も親を愛することができるのか。愛されるために生まれてきた命が、結果的に愛されない存在となってしまう、命の尊さが見失われてしまう。

「人間の価値はその遺伝子によって決まるのだろうか。」「この問いに対

して、私は遺伝子ですべてが決まるわけではないと考える。親が子供の人格を操作することはできない。人格とは周りの人からの愛情や、人の関わりの中で育まれていくものだ。そこには偶然の出会いや、失敗・弱さを乗り越える経験が欠かせない。

家族とは無償の愛でつながる存在であり、お互いの弱さを受け入れ、支え合うことで人の幸福につながる。つまり、人間の価値は遺伝子操作によってどう生まれたかではなく、どのような環境で育てられ、どう生きてきたかによって形づくられるのだ。

「弱さを経ない強さはない」。これは、「スラムダンク」の作者・井上雄彦さんの言葉である。人は壁にぶつかり、一人ではどうしようもないと感じたとき、家族とともにそれを乗り越えることで、より深い絆と愛を育むことができる。そんなふうに、いつも無償の愛で支えてくれ、私の弱さを受け入れてくれる家族を、これからも大切に、愛していきたい。だから私は、この技術を否定するのではなく、命の尊さを忘れずに、愛情と思いやりをもち、誠実に向き合っていくことが重要なのではないかと考えた。

スマホが奪ったもの・与えたもの

福知山市立南陵中学校 三年

植村 照来

母がよく言う、携帯電話の無かった時代とはどんなものなのだろうか。今では様々なことがスマートフォン（スマホ）ひとつで簡単にできてしまふ。ほんの二、三十年前まだスマホが無かった頃は想像もできなかった世界だ。そう言われると現代は便利で快適な時代に見えるが、それは本当に快適だと言えるのだろうか。

まずは、連絡手段について見ていこう。今はほとんどの人がLINEなどのアプリを使って電話やメッセージのやり取りをしている。僕たちはあまり使わないが、社会人であればメールやメッセージも利用する。いずれにせよ、現在はスマホひとつで事足りている。

しかし、そのスマホが無かった時代はどうだろう。連絡手段は家の固定電話や公衆電話、手紙などが中心だった。数字だけが送信できるポケベルが出てきた時は、暗号のように数字を打ち込んで言葉に変換させるのに必死だったらしい。今とは違い、昔は誰かと連絡を取り合つのに少々お金が掛かり、手間も掛かったのかもしれない。

今はスマホさえあれば、連絡したいときにすぐ繋がれる。確かに便利だ。ただ、昔は「不便さ」ゆえの良さがあったのではないか。母が学生の頃は、出てほしい相手を取りそうな時間を見計らって電話をかけたたり、電話代がかさむからと、他県に引っ越した友達と話すために、わざわざ自分のお小遣いで公衆電話を使っていたりしたそうだ。そこには、今のよつにすぐに連絡ができず、簡単に話せないからこそ生まれる特別な価値がある。

値がある。

今の僕たちには、腹を割って話せる相手が何人いるだろう。家にいればオンラインゲームやSNSばかり、一緒にいるときも、それぞれがスマホに集中している。当たり前前の光景だ。でも、もしスマホが無かったとしたら？目的があっても無くてもなんとなく友達が集まり、他愛もない話を飽きるまで話し込むことができそうな気がする。僕の周りには、自分の家族であっても普段からあまり喋らないという人たちもいる。これは、スマホが人々から「奪ったもの」だと言えるだろう。

スマホは生活を利用・快適にするために作られたものだから、利点もたくさんある。情報を得るための手段は、新聞や本、テレビなどが中心で、情報を手に入れるにはひと手間かかるものだった。だが、今は知りたいことがあればインターネットを使ってすぐに検索できるし、勉強や仕事をより効率的に進められる。写真を撮ってすぐに記録を残せる点も素晴らしい。これは、スマホが人々に「与えたもの」だ。

情報技術の結晶であるスマホの普及や進化が「奪ったもの」と「与えたもの」がある。生活は豊かになってきていると思っていたが、実際はそうでもなかった。だからと言って「スマホを使わない方がいい」という訳ではなく、スマホの利点を理解して、スマートに、つまり、賢く使っていくことが大切なのだ。

「好き」が広げる世界

宮津市立宮津中学校 三年

岩西 遼

「これ、全部集めたいー」

そう思ったことは、誰にでも一度はあるのではないだろうか。お菓子のおまけのカード、人気キャラクターのグッズ、旅行先のパンフレット。気づけば、身の回りにはたくさん「集めたもの」がある。僕にとって、コレクションはただの趣味ではなく、「好きなものをもっと知りたい、もっと集めたい」という気持ちから生まれる大切な活動だ。

僕は昔からコレクションが大好きで、何かに夢中になると、それに関係するものをどんどん集めたくなってしまつ。本や漫画なら同じ作家の作品をそろえたり、フィギュアや靴なら違うデザインを見つけて集めたり、旅行先ではパンフレットやスタンプを持ち帰るのが楽しみだった。

なぜ人はこんなにも物を集めたくなくなってしまふのだろう。僕が物を集めているときの感情を振り返ってみると、「満足感」や「好奇心」にあふれていたことに気がついた。何かを手に入れたときの達成感、そして次に何を集めようかと考えるワクワク感。こうした気持ち、僕をコレクションへと向かわせるのだと思う。

しかし、コレクションは良いことばかりではない。たとえば、フィギュアやカードを集めようとするとき、思った以上にお金がかかることがある。くじ引きやクレーンゲーム、限定販売など、簡単には手に入らないものも多い。また、集めた物を保管するには棚やケースが必要だし、置き場所にも困る。集めているときは楽しいけれど、後から「こんなにお金を

使ってしまった」「部屋が片付かない」と後悔するところもある。

それでも、僕は「コレクションをやめたいとは思わない。なぜなら、やっぱり楽しいからだ。集めた物を見返すと充実感が満たされるし、「これまで集めることができたんだな」という自信にもつながる。将来、自分でお金を稼ぐようになったら、もっといろいろなものを集めてみたい」という楽しみもある。

ところで、僕はお金や場所をあまり使わない「知識のコレクション」も楽しんでいる。神話に興味をもったときには、神様の名前やそのエピソードをノートにまとめたり、戦国時代に興味を湧いたときには、戦国武将の名前を覚えたりした。こうした、知識のコレクションも、自分の知識や興味を広げてくれるし、勉強にもつながる。何かに夢中になる気持ちさえあれば、どんなことでも集めて楽しむことができるのだと感じた。

このように、コレクションにはいろいろな形がある。物を集めるのも楽しいし、知識や経験を集めるのもおもしろい。大切なのは、「好き」という気持ちを大切に、自分なりの方法で楽しむことだ。コレクションを通して得られる満足感や充実感、そして知識は、きっとこれからの人生にも大いに役に立つだろう。僕はこれからも、自分の「好き」を広げるコレクションを続けていきたい。

言の葉に宿る美

城陽市立東城陽中学校 三年

安道 凜香

私たちが普段使っている「日本語」には独特の美しさがある。その美しさとは、自然や感情も繊細かつ的確に表現する力、表現の幅の広さ、そして聞き手が考える余地を与える「含み」や「余白」にあると私は考える。

まず、日本語には豊かな語彙と表現方法がある。例えば、「雨」という言葉一つをとっても「小雨」「霧雨」「豪雨」「時雨」など、状況や季節、感情など全てを細かく表現できる。このように日本語は、自然や季節の変化を「雨」とまとめ蔑ろにせず、言葉の使い分けを通じて、その時々風景や心情を美しく表現できるのである。

また、日本語には「曖昧さ」や「含み」を大切にする文化がある。例えば、直接的に物事を言うのではなく、「くかもしれない」「よろしければ」などの遠回しな言い回しを使うことで、相手に対する思いやりや配慮、尊敬の意を表す。このような間接的な表現は、日本人が大切にしている礼儀などを表しており、言語の中に文化的な要素が含まれているといえる。

さらに、日本語には伝統である「和歌」や「俳句」といったものが存在し、限られた文字数の中で自然や感情を巧みに表現する技術が磨かれてきた。五・七・五という短いリズムの中に、四季の移り変わりやそれによる感情の変化など豊かな情景を表現する俳句は、日本語ならではの表現力の高さを象徴している。

また、漢字・ひらがな・カタカナという三つの異なる文字を用いることで、視覚的にも豊かな表現ができる。例えば「さようなら」という言葉をひらがなで書けばやさしさが、漢字で「左様なら」と書けば古風で堅く感じられる。文字の選び方一つで、文章の印象や感情の伝わり方が大きく変わるのも日本語の魅力である。

もちろん、日本語の曖昧さが誤解を生むこともある。しかし、その曖昧さこそが、聞き手に解釈の「余白」を与え、言葉の奥にあるものを想像させ、人によって意味の捉え方が違うという趣深さが出る。明確で短く伝わるような言語が主流となる現代において、日本語のこうした余白の美は、むしろ希少で価値のあるものである。

日本語の美しさとは、響きや形だけではなく、その背後にある文化、自然や季節を大切にしたい、相手を思いやる心、人によって解釈が変わるという特性といった要素が絡み合って生まれるものである。日本語を学ぶということは、はるか昔から受け継がれている言葉の美しさにふれることであり、それは日本人の精神を理解することに通じる。グローバル化が進み、便利な言葉が増え、日本語の価値を見出せない人々が多い今こそ、自国の「日本語」という言葉の美しさを再認識し、大切にしていく必要がある。

言葉は生きとる

亀岡市立南桑中学校 二年

水原 美玲

「ふいんき」。この言葉にふれたとき、あなたは違和感を覚えないだろうか。この「ふいんき」は「雰囲気」の正しい読み方ではないからだ。正しくは「ふんいき」と読む。しかしながら最近では多くの人が「雰囲気」を「ふいんき」と発音している。

このように、単語の中で前後の音が入れ替わる現象を音位転換という。先述の「ふいんき」の例に加え、古語の「あらたし」が年月を経て「あたらしい」と発音されるようになったことも一つの例だ。また、これは日本語だけに起こる現象ではない。例えば英単語の「ask」は一部の話者には「ax」と発音されている。一体なぜ、このようなことが起こるのだろうか。主な原因は二つ考えられる。

一つ目はその単語が発音しにくいことだ。「いびん」「ふんいき」と「ふいんき」の二つの発音を比較してみよう。「ふんいき」では「ん」と「い」の連続に、発音しづらさを感じてしまう。一方、「ふいんき」ではこのような不快感はなく、むしろスムーズに発音できると感じられる。このことは、私たちは意識せずとも「発音しにくい音の連続」を「発音しやすい音の連続」へと変化させていることを示唆している。

二つ目は、私たちの脳の言語習得過程のメカニズムや類推による影響である。特に幼児の場合、耳から聞いた音をそのまま再現せず既に知っている語彙のパターンや自身の発音能力に照らし合わせて再構築しようとする。このときに音の順序を入れ替わってしまうことがあるのである。

また、無意識のうちに学習した言語の音のパターンを個別の単語に当てはめてしまい、音位転換が起こる可能性もある。例えば「シミュレーション」を「シユミレーション」と誤って発音するのは、「シユミ」という音が日本語に存在しており無自覚にそのパターンを適用してしまっただと考えられる。

そのうえ、音位転換はある興味深い側面を持っている。それは、誤った読み方が単なる言い間違いとして消滅せず、時に正しい読み方として年月を経て定着する点だ。例えば前述の「あらたし」の他に「さんざか」「さざんか」に「あきははら」が「あきはばら」に変化したことが挙げられる。さらに一説によると十六世紀頃のヨーロッパでは「ask」ではなく「ax」が標準的な発音とされた時期があるそうだ。すなわち、言葉は話者の影響を受けながらいつの時代でも変化を繰り返しているのだ。

このように、言葉は固定的ではなく流動的で話者の使用によりその形を変化させ続けている。つまり言葉は生きているのだ。「ふいんき」が正しいとされる日も案外遠くないのかもしれない。使わない日はないほど、私たちが密接な関係にある言葉の生き様にも目を向けてみてはどうだろうか。

森が教える「人間らしさ」

福知山市立南陵中学校 三年

山崎 真帆

あなたは、昔話を読んだことがあるだろうか。浦島太郎やシンデレラなど、世界にはたくさんのお話や童話がある。そして、その展開やキャラクターは多種多様だ。

国語の授業で、場面や展開の意図を解釈する見方を学んだ。そこで、私はこれらの物語の舞台に注目してみた。ストーリーが進む場所は様々あるが、森や山が出てくることが圧倒的に多い。お菓子の家は森の中にあるし、鶴を助けるのも山の中だ。単なる場所として出てくるだけでなく、物語のキーとなる大きな役割を担っている。昔話において、これほど森が重要視されているのはなぜだろう。

色々な童話を読み込んだ結果、物語における森の役割は大きく分けて二つあることが分かった。

一つ目は、幸運に繋がる出来事が起こるパターンだ。動物を助けてお礼をもらったり、妖精や神様に出会ったりする場所は、森の中であることが多い。そしてもう一つは、恐ろしい目にあうパターンである。悪の象徴としての狼や山姥などの住処になっていたり、神隠しにあったりする。また、「舌切り雀」や「金の斧銀の斧」のように、訪れる人によってどちらかに分岐する形の物語もある。

同じ舞台なのに、これほどの違いがあるのはなぜだろうか。私は、昔話でできた当時の人々の生活の仕方にヒントがあると考えた。

昔、人間は自然がもたらすもので生活していた。その中でも森は燃料

や食料など、たくさんのものを与えてくれる場所だったに違いない。その一方で、時に危険をもたらす畏怖の対象でもあった。その二面性が童話にも表れている。森は、生活の近くにありながら人間の手が届かない場所でもあったのだ。

今の私たちには、簡単に木を伐採する技術がある。その技術があったからこそ文化は発展し、人間は豊かな生活を手に入れた。しかし、物語を通して受け継がれてきた「自然への畏怖や感謝」は薄れつつある。昔ほど生活の近くに自然があるわけではない。それでも自然から得た資源を使って生きている以上、忘れてはいけないものがあるのではないだろうか。

近年の技術の進歩は目覚ましく、生活はどんどん快適になってきた。人類は文化の発展によって、便利で生活しやすい、「人間らしい」暮らしを手に入れることになる。しかし、単に快適に過ごすことだけが「人間らしい」暮らしというわけではない。

森が舞台として描かれ、「自然への畏怖や感謝」を読み取ることで、昔話は、国や民族を問わず世界中に存在している。それは、言語や文化の違いを超えて、人間の心の底にある「畏怖しながらも感謝する」自然への思いであり、共存するための知恵なのだ。

便利で豊かな生活があることを当たり前だと思わず、資源をもたらしてくれる自然への感謝を忘れない。それが、本当に「人間らしい」生き方といえるのではないだろうか。

見えないもの

木津川市立木津中学校 三年

小西 美蘭

私が学校の授業の中で特に印象に残っているのは、ある音楽の授業である。それは、同じ曲を「音だけで聴く場合」と「映像を見ながら聴く場合」とで比べるという体験だった。

ただ同じ曲を二度聴くだけのように思えるが、実際に体験してみると受け取る印象が大きく異なり、強く心を動かされた。なぜ、同じ音楽であるにもかかわらず、聴き方によって感じ方が変わるのだろうか。この問いをきっかけに、私は音楽の奥深さや物事のとうえ方について考えるようになった。

まず、音だけで曲を聴いたとき、私は旋律やリズム、ハーモニーといった音楽そのものの美しさに集中させられた。目を閉じて耳だけで聴くことで、音の重なりや楽器の特徴がはつきりと浮かび上がり、自分の中で情景や感情を自由に描くことができた。例えば、穏やかな旋律では静かな自然を思い浮かべ、力強いリズムでは壮大な舞台を想像するなど、自分なりのイメージを広げる楽しさを味わった。音だけに集中することで、自分の感性を使って音楽を理解する面白さに気づいたのである。

次に、映像を見ながら聴いたとき、音楽の印象は大きく変わった。演奏者の表情や動き、会場の雰囲気といった視覚的な情報が加わることで、曲が持つ感情やメッセージを、より直接的に感じ取ることができる。演奏者が息を合わせて演奏する場合には緊張感が伝わり、笑顔で演奏している姿を見ると音楽の楽しさが一層強く感じられた。また、音だけでは

気づけなかった楽器同士のやりとりや指揮者の役割も理解でき、音楽は「人と人の協力によって成り立っている」ことを実感した。映像により、曲の背景や演奏者の思いがより具体的に伝わったのである。

この二つの体験を通して、私は「同じ曲でも聴き方によって受け取る印象が変わる」と改めて実感した。音だけで聴く場合は想像力によって自由に情景を描ける一方、映像を伴う場合は演奏者の思いや会場の雰囲気をも具体的に理解できる。どちらの聴き方にもそれぞれの良さがあり、一つの正解ではなく、多様な見方が存在することを学んだ。このことは音楽に限らず、他の教科の学びや日常生活にも通じる。物事を一方だけから見るのではなく、さまざまな角度から考えることで、新しい発見や深い理解につながっていくのである。

私はこの音楽の授業を通して、音楽の楽しみ方が広がっただけでなく、自分の考え方にも変化が生まれた。今後は音楽を聴くときに音だけに集中して想像を膨らませる聴き方と、映像を通して演奏者の思いを感じ取り、日々の生活においても生かし、一つの見方にとらわれずに幅広い視点で物事をとらえていきたい。そうすることでこれからの学びがより深く、より豊かなものになると考える。

「便利の達人」になる

亀岡市立育親学園 九年

寺竹 瑠音

現代にはすぐ便利な物がたくさんある。その代表的なものの一つがスマートフォンであることはいうまでもない。インターネットが普及した現在社会においては、スマートフォンさえあればなんでもできてしまう。これもつ機能は、まるでコンビニエンスストアのようだ。チャットGPTが登場した時にはかなり驚いたし、もはや私たちの生活に与える影響は絶大で、切っても切り離せない存在になってしまっている。

しかし、私はある新聞記事で読んだ、「今のインターネットは速すぎて人間に考えさせない装置となっている」という言葉と「時間が溶けている」という言葉が心に残り、スマートフォンにはたくさんの利点がある反面、このままいけば私たちが失ってしまうものもたくさんあるに違いないと考えるようになった。そこで、スマートフォンの便利さの裏にある不安要素について考えてみた。

まず一つ目はかなり前から言われている「依存性」である。私が調べたところによると依存の可能性がある三〇代の割合が五年前に比べて五〇パーセントも増えていることがわかった。スマホ依存は、視力の低下や集中力・記憶力の低下など、身体・精神的な健康被害を起す可能性があると言われている。スマホの機能がより充実したものになればなるほどますます増えると考えられる。

二つ目は、SNSに関する様々な問題だ。一番に危惧されるのは、詐欺など犯罪に巻きこまれたりすることだが、私は最近気になったニュー

スをSNSのメリット・デメリットの比較という観点から分析してみた。するととても気にかかることが出てきた。その二つ目は、「甲子園に出場していたある高校が、過去の不祥事をSNS上で拡散され、二回戦からの出場を辞退した」というものだ。

まずこの出来事に関するメリットは、今までなら隠蔽されてきたようなことや握りつぶされてきたような出来事が、SNSを通して明らかにされるようになったことだ。泣き寝入りという言葉があるが、今回SNSで広く拡散されたことによって、スポーツと暴力の問題が社会全体の問題として考えられるようになったと思う。

一方で、行き過ぎた誹謗中傷・無責任な発言が飛び交うのは、匿名というSNSの大きなデメリットであると思う。当事者でないものが匿名性を盾に、無責任な発言をする行為は、無意識のうちに自分が加害者になっている可能性があるということ認識すべきである。

日々進化する便利なもの。しかし私たちはその便利さを享受する分、マイナス面も常に意識しておく必要がある。便利なものに「考える時間を奪われる」ことなく、「便利さ」を使いこなす達人になることが大切なのだ。

歌が響く

綾部市立八田中学校 三年

四方 美音

歌は歌詞や音楽、歌声など様々な要素が組み合わさってできていて、その一つ一つに歌に携わった人々の想いが込められている。その想いに私たちは魅せられる。歌は人々に大切なことを教えてくれる、必要不可欠な存在である。

歌には人の心を動かす力が二つある。一つ目は、気分転換ができる点だ。歌には人をリラックスさせる効果があり、様々な場面で心を癒やしてくれる。私はテスト直前になるとプレッシャーを感じて、思わず歌を口ずさんでしまう。歌は人の心に寄り添って作られているため、心の友達のよう感じる。

二つ目は、聴いている人が涙を流すほどの感動を与えられる点だ。歌は歌詞や音楽、歌声などの一つ一つの要素が聴き手の心に深く刻まれる。特に歌詞は聴き手の共感を誘い、何度も聴きたくなるような歌となる。中には「歌に助けられた」と言う人もいるほどだ。さらに、感動的な場面でBGMとして感動的な歌を流すと、雰囲気ガラッと変わり、一気に心が感動で満たされる。感動的な場所と感動的な歌が共鳴し、人々に強い印象を与え心を大きく動かすことができるのだ。

歌が人々の心を動かすことには大きな利点がある。それは、教訓を語り継いでいけることだ。特に「戦争」や「平和」をテーマにした歌が当てはまる。私も何度か合唱で「戦争」や「平和」がテーマの歌を歌ったことがある。その度に、戦争の恐ろしさや平和を受け継ぐことの大切さを

強く感じる。それは、歌が独自の世界観で、テーマに沿った言葉や音楽を作っているからだだろう。全員で合唱することでより強く「平和を守りたい」と感じる。

そのようなこともあり、私は歌の歌詞などから、この歌は何を伝えたいのかを意識して聴くことを大切にしている。歌詞の中には作った人の世界観があり、そこから自分が考えもしなかったような新しい視点を知ることができる。また、その歌に集中し、音楽や歌い方などが組み合わさった部分を一つ一つの音として聴く。すると今まで何となく聴いていた歌から気付かなかった、作った人の工夫にふれることができる。それを知ることで、歌に込められた想いをより深く理解し、自分の考えを広げることができる。歌は人々に豊かな想像力を与えてくれる。

歌は人々に寄り添うこともできれば、伝えたいメッセージをはっきりと伝えることもできる。さらに、世の中に自分の考えを広めたり、教訓を語り継いだりすることもできる。歌には本のようなはたらきがあるが、本よりも身近でお金がなくても伝えることができる。それは歌にしかできない価値であり、人々が大切にしてきたことである。歌は私に新しい視点や豊かな想像力を与えてくれる。今も世界中では沢山の素敵な歌が歌い継がれている。沢山の歌が人々の心で響き続けているのは、歌が人々に大切なことを教えてくれる、必要不可欠な存在であるからなのだ。

「普通」のかたち

宇治市立西小倉中学校 三年

北村 彩実

私たちは日常の中で何気なく「普通」という言葉を使っている。「普通なり」という。「それは普通じゃないよ。」といった表現を家族や友達との会話で耳にすることが多い。しかし、その「普通」の基準は文化や地域、個人の価値観によって異なる。そのため、場合によっては他者の考えや個性を否定してしまったり、他者へのプレッシャーになったりする可能性もある。そこで、「普通」という言葉が人間や社会に与える影響を見つめ直し、どのようにその言葉を使っていくべきであるかを考えていきたい。

まず、「普通」という言葉の意味を調べると、「広く一般的であること」とあり、主観的な判断で使われがちとも記されていた。つまり、真実であるか確実でなくても、人によって普通とされる内容は変化しうるということだ。このように、「普通」の価値観は相対的であるため、話し合いで意見が分かれることがある。そうした場合、多数派の意見が普通とされ、少数派の人は同調圧力により普通から外れることを恐れ、意見が変わってしまうこともあるだろう。

「普通」の認識の問題もいくつか存在する。最近では、人工知能が発展し、人々はこのシステムに頼りがちになっており、人工知能が考えたことを普通と捉えるようになりつつある。それに伴い、自分らしさを失いかけている人も少なくない。自分の考えが思いつかなかったり、自信がなかったりしたとしても何度か考えることを繰り返し、自分としっかり

向き合うことが大切なのではないだろうか。

「普通」について考える時に、特に人々が一番に考えるべきことがある。それは、多様性の認識に関する問題だ。私の学校で、「LGBTQ+」について学ぶ機会があった。その中で、トランスジェンダーなどの方に対する差別や偏見がなくならないという現実があると知った。当事者の方への理解が広まらないのは、人々が「普通」に価値観が縛られてしまっているからだと考えられる。また、固定観念に囚われていることで、当事者の方々は「自分は普通でない」と思われる場面が増え、生きづらさを感じてしまうことにつながるだろう。これらの問題を解決し、誰もが生きやすい社会を作るためには互いに意思を尊重し合い、他者の意思を新たな知識や一つの視点として受け入れることが必要だ。

「普通」とは多くの人が口にできる言葉で安心や共感を生むものである。しかし、時として多様な考え方や個性を奪ってしまう。そのことを十分に理解して、一人一人がもつ色を大事にしていくべきだ。「普通≠正解」と認識して、「普通」という言葉に流されてはいけない。また、他者に自分の思う「普通」を押しつけてはならない。誰もが自分の色で生きるためには、色々な「普通」を尊重する姿勢をもち、互いの良さを見つめることが重要だ。だからこそ、「普通」に縛られない心の自由を大切にしていけるべきではないだろうか。

ダジャレの名誉回復

亀岡市立南桑中学校 三年

赤木 燈葉

皆さんは、ダジャレを使い、場が冷えてしまったことは無いだろうか。ダジャレとは、皆を笑わせる魔法のような言葉だが、最近ダジャレを聞く機会がとてもなくなくなっていると感じる。身の回りでも、ダジャレはくだらないものとして扱われがちで、国語辞典にも「少しも感心できない、つまらないしゃれ」とされている。そこで、今一度ダジャレの魅力に迫りたい。

そもそもダジャレとは何なのか。定義には諸説あるが、「同音異義語を使う」「なるべく簡単に短く言う」「意味を付けずナンセンスに」が大原則だという。ダジャレの歴史は、江戸時代まで遡るといわれており、元々は貴族の文化として発展した「洒落」に由来するそうだ。「洒落」は和歌の掛詞と似た表現技法だが、その質が低いものが「駄洒落」と呼ばれるようになったといわれている。

私も実際に友人との会話でダジャレを使うことがあるが、お世辞にも場が盛り上がるとは言えない。その「盛り上がらない」という特性を活かし、皆を笑わせるといった使い方は存在する。しかしそれはダジャレで笑っているのではなく、「ダジャレを言うてすべった」という状況に對して笑っているのだ。このことから、ダジャレだけでは笑いが取れず、あまり面白い物だと思われていないことが分かるだろう。

そんな不遇なダジャレだが、社会の中で不要かというところではない。例えば、ダジャレは様々な会社の広告、キャッチコピーとして使われ、

テレビCMでも大活躍しているのだ。例えば、車メーカーの「かっこインテグラ」やビザチエーンの「どこの・ピザ」、鉄骨事業を行う企業の「サス鉄ナブル」など、多くの企業CMでダジャレを耳にする。音の響きが耳に残ったり、コンパクトに企業や商品の特徴を伝えたりと、ダジャレが使われるだけで見ている側に強い印象が残る。また人前でプレゼンをしたり、説明をしたりする場面で、手軽にユーモアを交えられるのもダジャレの良さである。時々ダジャレをはさみながら進められる授業とそれが無い授業では、前者の方が飽きを感じずに集中が続くと私は感じる。このように、ダジャレには見聞きした人に強い印象を残したり、相手を和ませたり、話にユーモアをもたらすという効果がある。

最後に、「ダジャレを言うのは案外簡単ではない」と言うことを付け加えたい。ダジャレを言うには、それだけ言葉の知識が必要となる。同時に、相手や状況、目的に応じた言葉の選択ができるだけの、頭の回転や柔らかさも必要である。ダジャレは、実は高度なコミュニケーションなのである。

「くだらない」「面白くない」と低く見られがちなダジャレだが、実は歴史のある、高度なユーモアである。社会の様々な場面で確かに活躍しているそんなダジャレの、名誉回復を私は望む。

個人的な達成感を超えて

福知山市立三和中学校 三年

羽瀧 颯真

先日行われた参議院議員選挙では、多くの人が立候補し、議席を争った。中には、長い歴史を持つ既存政党に属する人もいれば、新しく立ち上がった政党の代表として挑む人もいた。新党の旗揚げは、資金や人材の確保、そして議席獲得への不確実性といった大きなリスクを伴う。それでもなお、自らの理想を実現するために、既存の組織に留まるのではなく、自ら行動を起こす人々がいる。彼らの行動の先には一体何があるのだろうか。

この問いを考える時、私は身近な例として自分が経験した生徒会活動を思い出す。生徒会本部役員は、全校児童生徒のために活動を企画し、実行する。もし、自分がしなくても、学校生活に支障はない。それでも自ら立候補し、活動したことで、貴重な体験をし、充実した学校生活を送ることができた。その反面、普段の学校生活が疎かになってしまっこともあった。例えば、卒業式の送辞の文章を考える際に、フィードバックが多く、心が折れそうになった。それでも、諦めなかったことで、コミュニケーション能力や実行力といった、社会に出ても役立つであろう「自分の力」を身につけることができた。

生徒会活動は、誰かがやってくれることを「あえて」自分からする行動だった。この、「あえて」行動することの先には、他者には得られない「個人的な成長と達成感」がある。これは、起業家や新たな政党を立ち上げる人々の動機にも通じるものだろう。新たな事業を興す起業家は、

大企業で働くよりも大きな苦労を経験するかもしれないが、その困難を乗り越え、成功を収めたとき、それは単なる経済的利益だけでなく、自分で何かを成し遂げたという深い達成感をもたらすはずだ。この達成感こそが、リスクを伴ってでも挑戦する、大きな原動力の一つだと考える。しかし、個人的な達成が全てではない。さらにその先には、「社会への貢献」という目的がある。生徒会本部役員は、掲げた公約を通じて、全校児童生徒が楽しく、過ごしやすい環境を目指す。また、起業家は、自社の製品やサービスを通じて社会を便利にすることを目指す。同様に、政治家は、掲げた政策を通じてよりよい社会を築き、人々の生活をより豊かにすることを願っている。彼らの行動は、個人的な達成感や喜びを超え、より大きな「誰かのため、社会のため」という利他的な目的に向かっている。

私たちは今、過去の多くの人々が、何もないとところからの社会の発展のために行動を起こしてくれたおかげで、便利で豊かな生活が送れている。そして今も、よりよい社会を目指して、多くの人々が行動を続けている。その根底には、個人的な成長や達成感だけでなく、社会に対する強い思いがある。その思いこそが、たとえ困難に直面しても消えることのない、行動の軸となるものなのだ。そして、そのような利他的な動機で行動できる人こそが、他者から尊敬を集めるのだと私は考える。

▼文集作品の部 総評

最優秀賞

京田辺市立大住中学校

「自動化社会で手料理を食べるには」「や」「多様性は実現されているのか」「昔と今の女性の自立の違い」などといった、現代的な諸課題をテーマに据えたものが多く、社会問題への関心の高さをうかがうことができました。それらを一般論として閉じてしまつのでなく、中学生の立場から自分事として論じること共感を得ようとする姿勢にはとても好感がもてました。また序盤に投げかけられた主題に向かって丁寧に論を進めることで、最後まで読ませざる展開になっている作品が多くありました。一方で、「なぜ『三度目の正直』というのか」「や」、「小さな失敗を大きくとらえてしまつのはなぜだろうか」、「料理のレシピ」に載っている『適量』や『少々』はどれだけの量？」といった、まさに日常の中にある素朴な疑問と向き合つて、解決しようとする文章が多くあったことも印象的でした。

優秀賞

府立福知山高等学校附属中学校

「言葉に宿る美」「社会を変える繋がり」、「言葉でつながる、広がる」、「変化する真のコミュニケーション」といった、言葉やコミュニケーションに着目した文章が目立ち、そこから「人と人とのつながり」や、「社会とのつながり」を論じる流れになっている作品が多くありました。これは福知山高等学校附属中学校だけでなく、今年度の京都府全体の傾向と言つてもいいかもしれません。身近な人々だけでなく、国際的なつながりや過去の偉人とのつながり、芸術や文化を通じたつながりなど、多様な場面で「つながり」が意識されていることが伝わってきました。共通の視点をもちながら、まさに多角的なアプローチで主題に迫る文集となっていました。

城陽市立東城陽中学校

【個人作品の部】で優秀賞を受賞した「言の葉に宿る美」を筆頭に、「音楽という名の言語」や「方言の危機」、「ハラスメントの闇」、「敵対と信頼」、「災害と共に」といった、読者を引き込むための題名の工夫がある作品が多くありました。一見すると興味をもたれにくそうな題材や、どこかで聞いたことのある一般論になってしまふようなテーマを取り上げていても、中学生ならではの切り口で丁寧に論議に迫り、内容や構成に工夫を凝らして読者に自らの主張を届けようとしている作品が複数ありました。多くの作品で「私たち」という人称が用いられており、読み手も含めた全体のものとして論議を共有したいという姿勢が見える書きぶりが印象的でした。

京田辺市立田辺中学校

SNSや生成AIといった現代の情報社会を題材にした作品が非常に多くありました。その中でも、「言葉が与える影響」や「言葉の重み」、「言葉は全て唯一無二」といった言葉に着目したものや、「理想の話し合い」、「挨拶で明るい未来へ」、「噂との向き合い方」、「修学旅行で「伝える」というようなコミュニケーションを題材にした作品が多数を占めています。田辺中学校の文集においても、人間同士の関係性の構築の原点ともいえる「言葉」に対する中学生の皆さんの関心の高さを改めてうかがうことができます。田辺中学校からは昨年度、多数の作品を二年生（今年度の三年生）が提出してくださっていました。継続した取組が形になったと言えるでしょう。

木津川市立木津中学校

学校文集の中から【個人作品の部】A分野最優秀賞に「遺伝子を超えて」が、B分野優秀賞に「見えないもの」が選ばれています。力のある作品が一定水準以上の他の作品をより引っ張っている印象の文集となっていました。「赤ちゃんは言葉から何を学び取るのだろうか」をはじめ、「余白の意味」、「生物をつなぐ夜景」、「性別を超えて学ぶ力」、「生徒が授業をするメリット」、「笑いの効用」といったように、自由な発想からくる多様なテーマ設定も印象的でした。多くの作品において学校の授業や日常の場面からの気付きが起点になっており、身の回りにある問題を自分に引きつけながら述べていくことで、読者に対しても共感をもたらす論述になっていました。



小論文はどつ受けとめられるか 作品を審査する眼

京都教育大学 植山 俊宏

みなさんは、この小論文グランプリに応募するために、どついうことを考えながら小論文を書いたのでしょうか。材料集め、問題、テーマの設定、下書き、結論の導きだしなどの手順、作業、労力というものがあつたことでしょうか。またクラスメートや先生方にアドバイスをもらいながら文章を仕上げることもあつたかもしれません。さまざまな手間をかけた多くの時間を使って小論文を仕上げたことは、読ませてもらったときにすぐ分かりました。大変なご苦労の結果、仕上げられた小論文であつたことに私は敬服しました。

では、どのような点に注目しながら私が皆さんの小論文を読んでいたか。

一言で言う私の胸に書き手、筆者の主張、考えが届いてきたかです。小論文ですから、届けるべきものは、書き手、筆者の主張、考えです。それも明快に一つのテーマ（問題）について考えた結果、こついうことを述べるという主張、考えがはっきりしていることが必要です。そして、その主張を強く支えるための根拠・理由の確な提示も大切です。私とつ読者は、それを文章から受け取るために読むのですから。

この小論文が読み手、読者の胸に届くこととはどついうことか。まず価値のあること、今必要なことを述べていることが大切です。

みなさんの周りにはさまざまな環境があり、いろいろな出来事が起きています。身の回りはもちろん、マスメディアを通して伝わってくる出来事もあります。それをタイムリーに取り上げている小論文も多く見られました。

また、日々の学びの中から、教科の学習の中で本当に深く学び得たこ

とを自分の考えや主張にして文章という形にしているものもたくさんありました。

それ以外にも、毎日の生活の中で疑問に思ったことや、学校生活の中で起きた問題などを論題にしている作品も一定の数見られました。

どれも自分の主張や考えを他者、他の人に届けたいという思いに溢れていました。しかし、届き方には違いがありました。

例えば、次のようなタイプのものがありました。

○思いはあるけれど、それが考えのまとまりまで深まっていないもの

○逆にうまく文章にはなっているけれども、主張や考えがこれまでで言われてきたことあまり変わらないもの

○主張や考えはある程度伝わるが、それがうまく言葉、表現に表し切れていないもの

○思いや考えが強すぎて他の考えや、他の立場の人を寄せつけないようになっているもの

○主張は明快だが、それを支える根拠や理由が明確に、論理的に述べられていないもの

細かく分けていけば、十人十色、百人百様の姿がありました。文章というものはおもしろいもので、六〇〇編を超える作品を読んでも同じもの、そっくりなものは出てこないのです。当たり前です。一人一人の中学生が自分の主張、考えを書いているのですから、みなさんの周りの友だちにそっくりな考えを持つ人がいないことと同じように、同じ文章を書く人はいないのです。

さて、ではどこに重点を置いて、みなさんの小論文を読んでいたかです。胸に届く届き方ということだけを言いますと、主観的に、私という読み手の好みに左右されると受け取られるでしょう。ですから、その胸に届く届き方を丁寧に分析しながら読んでいきました。

小論文ですから、主張、考えの明確さ、その価値の高さが重要です。

これは大きな基準です。しかし、それが突然出てくるのは困ります。大事に思われない事実や出来事、経験、資料などを列ねながら、最後に突然重要な主張が行われたり、大事な考えが述べられたりしても、あまり効果がありません。

胸に届けるということは、一歩進めるとその届けた人の胸に響かせることであり、なるほどそうか、こんな考えもあるのかと感じ入らせることです。

これを書き手と読み手の関係で説明してみます。書き手は読み手に対して「説得」をします。この「説得」は、普通に使う日本語とは少し意味が異なります。ただ単に相手に説明をするのではなく、自分の考えを分かってもらい、賛成してもらおうという働きかけの意味です。

今度は、読み手から書き手という方向を考えます。文章を読んで内容を分かつとします。例えばみなさんが自宅で家族同士書いたりするメモの場合は、「これから〇〇さんの家に遊びに行きます。帰宅は〇〇時です。」で内容は理解できますし、目的も達します。ところが小論文は単なる伝え合いではありません。書いてあることが理解できて、その上で「なるほどそうだ」と捉えることが大事なのです。これを「理解」をより一歩進めた、もう少し深めた形で「納得」と呼ぶとしましょう。そうすると、小論文を書くことが「説得」で、読むことが「納得」であるという両者の関係が見えてきます。

この「説得」の質が高いことが小論文の優秀さになることとなります。単にこれこれの条件が揃っているから、「説得」の質が高い、つまりレベルが高いということにはなりません。読み手に読んでもらう、「納得」をもたらしたときに初めてその小論文は優秀だといえるのです。

小論文を審査するときは、読み手として、どの程度「納得」できるか、どのくらい「納得」できるか、「納得」できないところはどこか、を見極めなければなりません。審査では、結論として出された主張や考えに

加えて、それを導き出していく手順や方法、事実、経験、情報、資料の使い方の適切さを丁寧に見ていくこととなります。「論証」という堅い言い方をすることがあるのですが、言葉を使って証明する、少し柔らかくいえばなるほどと思わせるすじみち立てを明確に示す。この「論証」「すじみち立て」が不自然でなくつながっていると、どんな主張、考えを結論として導いてくれるのだろうかと期待が湧きます。読み手としてうまく「納得」させられるといい気持ちになります。「論証」と「納得」という言葉をキーワードにして自分の作品を読み直し、書き直したり、友だちの作品についてアドバイスをしたりということにも取り組んでほしいと考えています。

小論文は、まず自分自身を「納得」させるために書きます。そのためには、実は、多くの他者、読み手を「納得」させることが必要です。自分以外の経験や考えをもつ他者を「納得」させるための材料、論理展開、結論、用語を的確に用いることができれば、効果的な、質の高い小論文を書くことになるのです。そして、それは最後に自分に戻ってきて、このようなことを論じ、結論を導き出せる自分であったかということを見出すことにつながります。

社会に出て、文章を書き、論じて、読み手を「納得」させる力を持つこと、高めることは、たいへん難しいことと感ずるかもしれません。しかし、それは目の前の階段を一段ずつ上がっていけば、必ず次の階へ達することができるように、身近なところに問題を発見し、論じ、結論を導く習練を積んでいけば難しいことではないのです。自分と他者とが分かり合い、納得し合うことから始めて、自分と社会との関係を作っていくために小論文を有効に活用していきましょう。「胸に響く」とは「納得し合う」ということなのです。

小論文を書くための手引き

一、小論文とは —人はなぜすじみちを立てて書くのか—

自分をはっきりと捉え、鏡に映してすじみちを明確にする

「学びの小論文」を書く行為には、自分自身を捉え直すための機会、作業という意味があります。この自分を捉えることに挑戦することは、中学生の時期にはとても大切なことです。自分の将来、進路、得意分野、適性というものは曖昧に感じるものです。そして、しばしばこんな将来を描いていいのだろうか、本当にこの分野が得意なのだろうか、こんな仕事は向いているのだろうかなど、さまざまに悩む時期が中学生の時期です。どうしてもマイナスに考えがちになったり、時として楽観的になったり、それらが日々入れ替わりに現れたりします。しかし、そこには、すじみちがなかったり、材料や根拠を整えて考えなかったりということがよくあります。「学びの小論文」は、その悩む自分にすじみちを明確にする、材料や根拠を的確に揃えるということを求めてきます。答えを出すように働きかけてきます。

自分の考えや気付きを鏡に映すいくつかの方法

「学びの小論文」を書く行為を通して、自分の考えや気付きをきちんと鏡に映す方法を習得していきます。鏡に映す方法にはいくつかあります。

まず、なんとなくつかみかけた考えや気付きを鮮明にしていく方法があります。つかんだ考えや気付きを元にそこにたどりつくまでのみちすじを整理したり、考えや気付きをもたらした根拠や理由を考えたりすることで、自分の考えや気付きははっきりと姿や形を現してきます。鏡に映ったぼんやりとした考えや気付きを明確にする、そこにみちすじを与える、なぜ映っているかの理由や根拠を考えることは自分で自分を納得

させる方法です。

次に、鏡に映る考えや気付きの数を増やして、比べていく方法があります。複数の鏡を用意し、そこに必要なくつかの考えや気付きを映し、比べていくことで自分の考えや気付きの価値や意義を明確に、深く捉えていく方法です。よく使われることが、正反対の考えや距離の遠い考えを捉え、その長所や短所をクリアにして、自分の考えや気付きと比べる方法です。そうすると、自分の考えや気付きの長所や短所が明確に把握できるようになります。

さらに、今の姿や形だけでなく、想像や推論を通して将来の姿や形を鏡に映すことで、今の自分の考えや気付きによって捉えているものや足りないものを見る方法もあります。中学生の時期から本格的な想像や推論ができるようになりますから、それを用いて、自分や社会や国の将来像を描き出すのです。かなり高度な方法ですが、考えることから社会への参加をめざしていくという、重要な能力を身に付けていくことができます。

また、強い思いや情熱を鏡に映し、その姿や形を明らかにすることで、その底に流れている自分の考えや気付きのみちすじを浮かび上がらせる方法もあります。書くという行為は、話すという行為に比べて、必要なことを漏らさず書くことや順序正しく書き進めること、言い過ぎや言い足りなさに注意することなどが求められるので、冷静さが要求されます。その冷静さが自分の思いや情熱をすじみち立った考えに整えていくのです。

二、小論文を書くための注意点

二二〇〇字の意味—「説得」のために必要な分量—

日本語の文章で自分の考えや気付きを論理的に記述するためには、最低八〇〇字が必要だと言われています。読み手にすじみち立っている内

容だと受け取ってもらうためには一定の分量が必要です。しかし、八〇〇字では、身近な題材しか取り上げられません。小学生なら行動や生活の範囲が狭いのでそれでいいのですが、より高度なことを学習する中学生だとこの分量では「学んだこと」の情報を十分に盛り込めないし、すじみち立てて書くことができません。どうしても二二〇〇字程度が必要になってきます。この分量は、成人でも目安となります。気付いたこと、学んだことを表すのは、中学生と大きな差がないからです。もちろん、職業の内容によっては、異なってくるかもしれませんが、日頃の生活や行動を元に自分の考えを述べるには、とりあえず二二〇〇字程度までで十分といえます。

読み手の反応こそが小論文を書くこと価値

小論文を書いて、自分の考えや気付きを読み手に働きかけ、その反応や感想をもらうことは、気が引けるし、少し恐ろしい気もします。しかし、小論文を書くことで他の人の反応や感想が引き出せるのなら、勇気を出して、その働きを活用し、自分のものにしていかない手はありません。小論文は、自分を高めて、伸ばしていく確実で最も有効な方法の一つです。腹を決めて、読んでもらうことを期待して小論文を書くことが大事です。

三、自分の「今」の考えや気付きが分かる小論文

迷いながら自分の「今」の考えを的確に述べる

人はみな「今」を生きていきます。しかし、思っているほど「今の自分」は、分らないし、捉えられません。小論文という方法は、その書き手の「今の価値、到達点」を示してくれます。小論文を書く際には、精一杯に自分の考えや気付きを見つめます。そして、それを的確に書いていくときには、手間がかかったり、材料に困ったりします。どう判断

すればいいかにも迷います。ですが、それだけ迷い、困った分だけ自分がとらえられるのです。確実に書き手の苦勞に報いてくれるのが小論文です。その利益は、実は、第一に書き手に生まれてくるのです。

「学び」の中から小論文のテーマを見出すという意味

中学生は、三年間さまざまなことに目を向け、多くのことを学んでいきます。その中で特に日々の学びの中からテーマをとらえて、小論文を論述することには、どのような意味があるのでしょうか。

教科の学習や行事には、明確な目的をもって、すべての中学生が取り組みます。その学びには、緊張感や真剣さがあります。それを捉え直し、文章にすることは、「学び」から深く、広い考えを作り上げることにつながります。

中学生は、毎日毎日大事なことを学んでいます。学んだことをノートに書いたり、グループで話し合ったりしています。あるいは、運動したり、創作をしたりしています。その学びの瞬間はまことに貴重なものですが、ほつっておけば、その場限りとなります。それをまとめて、自分にとってその学びがどれほど大事か、その学びのためにどれほど考えたかについては、どこかでまとめてみないと具体像はとらえにくいのです。小論文は、日々の学びに「形」を与えることでもあるのです。そのため、手間や暇をかけて小論文を書くという活動に取り組むことは重要です。思いがけない学び、意外な自分の価値を発見するために取り組んでもらいたいのです。

四、小論文が拓いていくこれからの自分、これからの道

未来志向を確実にしてくれる小論文

中学生にとって進路は最も重要な意味を持ちます。進路の選択は誰しも迷つところでは、自分に何が向いているか、自分に適したものは何か、

自分に何ができるかなど、さまざまに迷います。小論文を書くことがその迷いを解決するわけではありませんが、少なくとも出発点になる「今の自分」の姿を明確にしてくれます。特に小論文の場合、自分の気づいたこと、考えたことの価値をきちんと見定めることを目的としますから、自己の肯定、自分の積極的評価が行われます。「今の自分」を認めるためにすじみち立てて自分の気付きや考えを書き綴り、他の人が「納得」してくれるように工夫する営みは、最初に自分を「納得」させてくれます。

学んだ機会を活かし、自分を深める小論文

中学校の教科は、九教科あり、その中にはさまざまな学びがあります。その中で思いがけない、考えていなかった学びの出会いをすることがあります。特に実技を中心とする教科では、自分が出会ったことや実際にやってみたことでつかみとるものがあります。教科には好き嫌いがあるかもしれませんが、しかし、それを越えて、まず出会った自分をとらえる、学んだことの衝撃やインパクトの強さを考えることです。中学生には人生の他の時期にはない感性の鋭さがあります。小論文は、その衝撃やインパクトをそのままに終わらせないために書くという一面があります。なぜ、自分はそう感じたのか、そのように感じたことは社会でどんな意味を持つのか。それを考え、すじみち立てて書き表していくことで自分の感性に自信が湧きますし、それを社会で活かす見通しも持てます。

五、小論文の書き方

①日々の学びを見つめ直す

中学校の日々の学びをつかむためにはどうすればいいのでしょうか。答えは、「記録」。学んだことの記録を取って、積み重ねていきます。多くの教科ではノートをとっていますが、学んだことをまとめるためには別の「記録」の取り方が必要です。あらゆる教科、活動、行事などで一

区切りごとに短いメモを作ります。二〇〇字程度を目安に。二〇〇字は、だいたい五〜七文です。半分は、学習の事実を簡単にまとめます。残り半分は、そこから考えたことをメモしておきます。それをファイルに綴じて加えていきます。一年経つといろいろな学習の中で自分がしたこと、見てきたこと、気付いたこと、考えたことのメモがたまります。

②「もやもや」したテーマを引っ張り出す

そこから書けそうな「テーマ」を取り出していくのです。最初は、漠然とした、もやもやしたものでかまいません。入賞作品を見てください。すべてが「もやもや」から出発し、それを鮮明にして、追究しています。そして、その「もやもや」を考えているうちに、解決するために必要な情報を思いつき、集めていっています。

これらの二〇〇字メモ（と仮に読んでおきましょう）の中には、「もやもや」と同時にそれを解決するための「情報」、そして「方法」がたくさん貯えられているはず。自分自身だけでは十分に目配りができないときには、そのメモを友だちと見せ合って、アイデアを付け加えてもらいましょう。自分からも友だちのメモに付け加えてあげましょう。

③材料集め・情報収集を行う（調べることを加える）

「もやもや」が少し形になったものが、取り組みたい「テーマ」です。課題と言ってもよいでしょう。このことなら自分の意見が言えるかもしれない、ある程度の答えが示せるかもしれない、というテーマにします。次には、そのための材料集めです。情報を収集します。その問題が出てきた授業や活動、行事を思い起こして、たくさんのお話をメモしていきます。使えるか使えないかは考えません。数は多い方がいいのです。たくさんのお話が出てきたら、その次に使いたい情報、使えそうな情報を分類していきます。★印とか、◎印などを使って、文章の中に書き

たいことを探します。ある程度まとまって論ができそうになったら、反論を予想して、そのこともメモとして書き加えておきます。

④集まった情報を分類し、整理する（取り上げるもの、捨てるもの）

その次は、選択、絞り込みです。マッピングという方法を用いてもいいでしょう。大事だと思われる情報を紙の真ん中に書き、囲みます。そこから線を引いて、関連しそうな情報を付け加え、それも囲みます。真ん中に大きな〇があり、そのまわりに〇が増えていきます。そうしていくうちに、使えそうな情報やすじみち（論理）が区別されます。

この辺りで自分の問題意識は明確になっているはずですが、このことを書きたいという書き出しと中心が固まってきました。ここでも何について論じたいのかを二〜五行程度でいいから書いてみます。

⑤構想図・構想メモ・設計図を作る

次には、構想図・構想メモを書きましよう。始め・中・終わりにもって来れそうな情報を配置します。横長の長方形を縦線で三つに分けた「中」の部分をもく取る（も）を用意し、その中に箇条書きで書きたいことを入れていきます。埋まった後、順序を確かめて、必要があれば、入れ替えも行います。これでおおよその設計図の完成です。

では、結論はどうすればいいのか。最初に、だいたいの結論になりそうなることをメモしておきます。最初からはっきりした結論がなくとも焦る必要はありません。「中」まで書き終わったときに、何度か読み直して、結論を出していけばよいのです。

⑥まず書く（試作品を作る）

作品として書くことは、最低二回は書くことだということを心に決めてください。手間がかかっても、二回は書くこと、そこに今まで気付か

かった自分の考えが浮き出てきます。それが「小論文で考えが磨かれる」ということです。書きっぱなしの作品はよい作品になりません。

最初の作品では、自分で納得できる表現がなかなか見つかりません。それでもとりあえず、書き進め、書き終わります。最初の作品は、試作品です。それを改良することに意味があります。

題名は、最初の作品の時は、仮の題名だと考えておきます。うまく付けれないときは、「〇〇について」とします。しかし、「〇〇について」は、題名として最もよくないものの一つなので、そのまま使わないことです。

⑦試作品を改良する・推敲—自分の力と仲間・友だちの力—

できあがった試作品を、自分の力で推敲をする。誤字や脱字などに気を付けます。声に出して読むとつながりのよさ、悪さに気がきます。次は、友だちと互いの作品を読み合って、アドバイスをし合います。考えの進め方が飛躍しているところ、より適切な表現、例や経験についての記述の過不足など、できるだけたくさん出してもらいます。しかし、それはあくまで参考です。どう書き直すかは自分で決めます。自分が他の人の作品の読み手になったときも、その人のためにアドバイスをしあげましよう。

段落分けについてです。これまでの入賞作品の段落数の平均は八段落弱です。一段落あたりの字数は約一九〇字です。読みやすさ、伝わりやすさの一つの目安になります。段落数が極端に少ないと一段落あたりの情報量が多くなって、読み手は読みにくいのです。迷ったときは思い切って段落を分けることを心がけましよう。

ただ、段落数は、文章の内容によって異なります。経験や事例、事実を多く使う文章は段落が多くなります。また一つのテーマを深く論述していくタイプは比較的段落は少なくなります。自分の文章のタイプをと

らえて、段落数を調節することも読みやすい文章を書く工夫の一つです。

⑧ 完成品を書く

アドバースを活かし、作品を書き直します。意外なほど自分の考えの深まりが実感できるでしょう。

いくつか注意点を挙げます。

長くなっている文があれば要注意です。三〇字から五〇字を目安に考えましょう。それ以上の場合、できるだけ二文に分けるようにします。一つの文は、一つの情報とそれが伝えたい判断を表します。それが長いと読み手にどのような情報なのか伝わりにくくなります。

引用をする場合は、その基になっているものをきちんと確かめましょう。引用を間違えると作品全体の信用が落ちてしまいます。

首尾の呼应を確認しましょう。最初の書き出しと終わりのまとめが対応しているかどうかを確かめることです。首尾の呼应が配慮されていると読んだ後の納得感が高まります。

小論文は、小ぶりながら知らない人にも読んでもらうように書いた、いわば公式の作品です。漢字の適切な使用、接続語の適切な使用、同音異義語の使用などは、辞書を引いて間違えがないかどうかを確かめましょう。

文末を考えましょう。同じ文末が繰り返されると書き手の考えが平板なものに見えます。推敲の時に、少しずつ変化をつけましょう。特に「思う」「思います」「の連発は、考えの曖昧さの印象を与えることになります。正式な題名は最後に付けます。完成した内容に合わせて、仮につけておいた題名を効果的な題名に変えます。入賞作品の題名は見てください。

⑨ 最終チェックで身だしなみを整える

最終のチェックとは、外出するときに自分の姿を鏡に映して、きちんと

とした身なりになっているかを確認するうちに、文章も確認するという最終段階です。文章のレベルを落とすしてしまうようなやや幼稚な表現や同じ接続語の繰り返し、文末の敬体と常体の混在などに気を付けましょう。

六、小論文作成の手順—みちすじのモデル—

小論文作成の手順を整理してみます。この手順がすべてではありませんが、一つの標準的なものとして参考にしてください。

① 日々の学びを見つめ直す

② 「もやもや」したテーマを引っ張り出す

③ 材料集め・情報収集を行う（調べることを加える）

④ 集まった情報を分類し、整理する

（取り上げるもの、捨てるもの）

⑤ 構想図・構想メモ・設計図を作る

⑥ まず書く（試作品を作る）

⑦ 試作品を改良する・推敲

—自分の力と仲間・友だちの力—

⑧ 完成品を書く

⑨ 最終チェックで身だしなみを整える

第13回 小論文グランプリ入賞作品集

令和8年2月

発刊・編集 京都府教育委員会 学校教育課

TEL 075-414-5833

